

# 差別事象を自分事として捉え、 差別をなくしていこうとする態度を育てる人権教育、同和教育の授業 ～自分の立場を明確にさせる選択型の発問と考えを深めさせる問い返しを通して～

胎内市立きのと小学校  
塚野 聡仁 (平成 21 年度)

## 主張

本研究では、差別事象を自分事として捉え、差別をなくしていこうとする態度を育てる人権教育、同和教育の授業を目指して仮説の検証を行った。これまでの自分の授業実践を振り返ると、自己を深く見つめる場面に課題があることが分かった。そこで、①自分の立ち位置を明確にさせる選択型の発問と、②考えを深めさせる問い返しの2つの手立てを講じた。その結果、①自分の立ち位置を明確にさせる選択型の発問は、差別事象を自分事として捉えるために有効であり、②考えを深めさせる問い返しは、自己を深く見つめる場面において、有効であることが示された。

## 1 研究主題設定の理由

人権教育、同和教育とは、差別を“なくす”ために行動できるような、よりよい社会の担い手となる人材を育てる教育である。今までの私の人権教育、同和教育の授業を振り返ってみると、人権についての表面的な指導や観念的な同和教育の指導となっていた。このような指導では、差別事象をどこか遠い他人事として捉えさせてしまい、自分に引きつけて考えさせることができなくなってしまう。このような授業になったのは、自分の生き方を考えさせるための効果的な指導ができていなかったからであると考えられる。

差別をなくすために行動するには、まず、差別事象を自分事として捉え、自分の生き方を見つめ直すことが大切である。人権教育、同和教育の授業において、このことを積み重ねていくことで、生涯に亘って自分の生き方をよりよくしようと模索し、豊かな人権感覚を備えた人材を育てることができよう。

よって、差別事象を自分事として捉え、差別をなくしていこうとする子どもの姿が具現できるよう、本研究主題を設定した。

## 2 研究仮説

人権教育、同和教育の授業において、自分の立場を明確にさせる選択型の発問と考えを深めさせる問い返しを行えば、差別事象を自分事として捉え、差別をなくしていこうとする態度を育てることができよう。

## 3 研究の内容と方法

### (1) 研究の内容

#### 【手立て1】自分の立ち位置を明確にさせる選択型の発問

提示された場面や状況に対して、自分の立ち位置を明確にさせるために選択型の発問を投げかける。例えば、AかB、もしくは迷うなどを選択させる。そして、各自の理由を明確にしてから後半の資料に触れさせる。自分の立ち位置と比較しながら考えを受け止めることになるため、自分事として捉えやすくなると考えられる。

#### 【手立て2】考えを深めさせる問い返し

分割提示した資料の後半を取り扱う場面において、考えを深めさせる問い返しを取り入れる。部落差別問題の授業では、被差別者の立場や思いを考えさせる問い返しを行う。被差別者の視点に立ち戻って考えさせることで、自分を見つめ直させる。それにより、被差別者の立場や思いを共感的に理解できるようになり、自分の考えや行動は加差別の人々と同じ立場であったという児童の差別意識に気づきやすくなると考えられる。

### (2) 検証方法

実践Ⅰ：令和6年度6年生(32人)と、実践Ⅱ：令和7年度3年生(26人)に対して、本研究仮説に基づく実践を行い、以下の点から手立ての有効性を検証する。

- ① 児童の発言や反応
- ② 振り返りの記述内容

【発言や反応、振り返りの記述内容の変容イメージ (以下のような変容が認められれば有効と判断)】

#### ○実践前

- ・観念的、表面的理解に基づく発言や反応。(「ダメだと思う。ひどいと思う。」等)
- ・自分の差別意識に気付いていない発言や記述。(「自分の地域が被差別部落だったら、差別されてしまう。」「いじめられても仕方がないよ。」等)
- ・他人事や他人任せの記述。(「差別がなくなるといい。頑張ってほしい。」等)

#### ○実践後

- ・差別を受けている人々の立場に立った、共感的な発言や反応。(「絶対に許せない。切ない思いをする。」等)
- ・自分の差別意識に気付いた発言や記述。(「自分も差別していた側であったと気付いた。」「ぼくたちもいじめをしている側と同じ。」等)
- ・これから差別に立ち向かっていこうとする記述。(「差別を受けている人々と一緒に考えていきたい。」等)
- ・自己を深く見つめ、注意深く生活していこうとする記述。(「自分の言葉や行動に気を付けたい。」等)



## 4 授業の実際①

### (1) 実践 I (令和6年度2月実施)

① 資料名 「気になる」(出典 自作・改作資料集「わがごと」より一部改作 別紙にて)

② ねらい

「自分の住む地域が被差別部落ではなかったこと」を知り、ほっとしている主人公について自分と重ねて考え、話し合うことを通して、「被差別部落かどうか気になること」自体に、無意識に被差別部落と自分の住む地域とを差別しようとしている自分に気付き、自分の差別意識と向き合って生活していこうとする意欲を高める。

③ 手立て

【手立て1】自分の立ち位置を明確にする選択型の発問

自分の住む地域が被差別部落かどうか気になる主人公の意識について考えさせる。主人公が、祖母に対して「おばあちゃん、うちって被差別部落？」と聞いた時のドキドキした気持ちが、「分かる」と「分からない」のどちらであるか、立場を決めさせることで、主人公と児童自身をつなげて考えさせ、自分事として捉えることができるようにする。

【手立て2】考えを深めさせる問い返し

児童とやり取りをする過程で、考えを深めさせる問い返しの中でも、特に被差別者の立場や思いを考えさせる問い返しに重点を置いて行う。今まで主人公の視点でしか捉えられていなかったところを、被差別者の視点で捉え直すことにより、自分の考えは加差別の人々と同じであったという児童の差別意識を引き出すことをねらう。

### (2) 実践の概要

① 手立て1：自分の立ち位置を明確にする選択型の発問

今までの人権教育、同和教育の学びを振り返った後で、資料の前半部分(①・②)を読んだ。主人公は祖母を前にして自分の住む地域が被差別部落かどうか気になり、祖母に尋ねようとするところで資料を区切った。「みんなは、被差別部落かどうか気になったり、ドキドキしたりした主人公の気持ちがわかりますか。」と問い、ワークシートに「分かる」「分からない」の2択で立場を選択させ、その理由を記述させた。クラスの90%にあたる29人が「分かる」と回答した。(別紙表1)

学級の大半の児童が無意識の差別意識をもっていることが明らかとなった。その後ネームプレートを黒板に貼り、各自の立場を明らかにした上で、それぞれの考えを発表させた。意図的に指名を行い、「分かる」と答えた児童から意見を述べさせた。適宜教師が複数ある考えを整理したり、学級全体に投げかけたりした。多くの児童が「分かる」側の意見に賛成する反応を見せた。

② 手立て2：考えを深めさせる問い返し(被差別者の立場や思いを考えさせる問い返し)

手立て1(選択型の発問)で意見を交流させた後で、資料の後半(③)を読んだ。主人公が祖母から、自分の住む地域が被差別部落ではないことを聞かされ、ほっとする場面である。資料を提示した段階で、一部の児童が「主人公は差別的である」旨の発言をし、この意見を深める形で授業が進行していった。

ここでは、主人公の差別意識に気付いたものの、授業序盤の自分自身の差別意識にまで目が向いている状態とは判断できなかった。そこで、「そこに本当に住んでいる人が聞いたらどう思いますか？」と、被差別者の立場や思いを考えさせる問い返しを行った。それにより、多くの児童が憤りを感じていた。

T:女の子はどうしてほっとしたのでしょうか?(板書する)

C:差別だよ…この人も差別しているなあ。

C:わかる!良かったって言ってるし。自分たちは被差別部落じゃなくて安心している。

C:俺たちは安心できない。差別している。

C:ここの意見書きたくないと思って。

T:どういうこと?

C:良かったじゃないと思う。被差別部落で差別を受けている人もいるのに。

C:自分が被差別部落じゃなくて良かったってことは、差別していた側。良かったとは思えない。

C:別に悪いことをしているわけではないと知っているのに…良かったってちょっと差別。

C:別に悪いことしていないのに。この(同和教育の)授業を受けていないに等しいよ。

C:被差別部落の人々は日本の社会や文化に貢献してくれた人たちなのに。

T:そこに本当に住んでいる人が聞いたらどう思いますか?

C:はあっ!ってなる。(そうそう)

C:怒るにきまっている。(怒る、怒る)

C:絶対そう!!

C:ぶち切れる!

C:憎しみが湧いてくる。

### (3) 実践 I の成果

① 手立て1(選択型の発問)により、差別事象を自分事として捉えることができた。

児童は素直に自分の考えを表出でき、差別事象を自分事として捉えさせることができた。授業序盤に発問したことで、児童は主人公と自分を行き来させながら自分事として考えることができた。また、授業の最後の振り返りでは、このときの自分と比較している児童の記述も見られた。例:別紙表3A 児の記述(「最初は差別されるところだと思っていただけ、みんなの意見を聞いて自分の差別心に気付くことができた。」)

② 手立て2 考えを深めさせる問い返し（被差別者の立場や思いを考えさせる問い返し）により、自分の差別意識に気づき、生き方を考えることができた。

自己を見つめ直し、考えを深めた結果として、自分の無意識の差別意識に気付いたと振り返りに記述した児童は、22人であった。授業序盤で、自分の住む地域が被差別部落かどうか気になると回答した児童29人のうち、75%の児童に自分の差別意識に気付いた記述があった。（別紙表2）

振り返りの記述では、自分の無意識の差別意識に気づき、被差別者の立場や思いに寄り添った考えを書いた児童が一定数見られた。このことは、被差別者の立場や思いを考えさせる問い返しを行ったことが、一定の効果をもたらしたと考えることができる。このことから、授業序盤で明らかとなった自分の無意識の差別意識に気付かせるためには、被差別者の立場や思いを考えさせる問い返し、ある程度効果的であると示された。（別紙表3）

別紙表1のC児の記述の変容

授業序盤：もし被差別部落だったら、それを知っている人から差別を受けるかもしれないし、就ける仕事や結婚できる人などが限られてくるから。

授業終盤：差別はダメでも自分が今後どうなっていくのか不安な気持ちがありました。でも授業を受けて、実際に差別を受けている人の存在に気付いて、自分の差別意識をなくしたいと思いました。今後は自分で差別意識をなくすことを考えていきたいです。部落差別について更に勉強したいです。

このように、今まで被差別部落は差別される場所であると考えていた多くの児童が、自己の差別意識に気づき、今後の生活において自分の心をしっかりと見つめ直していきたいという旨の記述をしていた。自分の差別意識に気付いたことで、自分も含めた社会全体から差別をなくしていきたいという態度をもつことができた。

(4) 実践Iの課題

本実践では、選択型の発問を行ったことにより、差別事象を自分事として考えることができた児童が多くいた。一方で学習したことの振り返りを書くにとどまり、自分の差別意識には思いが向かない児童もいた。そこで、被差別者の立場や思いを考えさせるといふ、共感的な問い返しだけでなく、問い返しの種類を増やし、それらを行うタイミングやどのように組み合わせるか等の工夫を実践IIに向けて検討していく。図1にある「発問の立ち位置の4区分」を参考に、子どもの思いに応じた問い返しをすることで、より考えを深めさせたい。

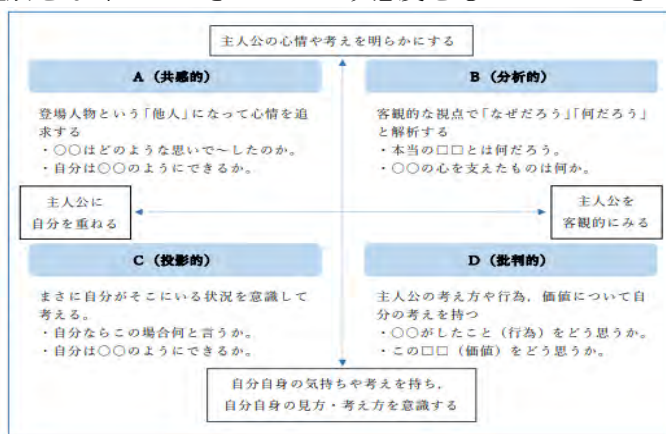


図1 「発問の立ち位置の4区分」を基に宮城県総合教育センターが作成した図

5 授業の実際②

(1) 実践II (令和7年度9月実施)

- ① 資料名 「仕方ないと思うよ」(出典 自作・改作資料集「わがごと」より一部改作 別紙にて)
- ② ねらい

「何か理由があれば、相手を傷つける行為でも、ある程度は許される」という考えについて、被差別者の立場になって考えることを通して、理由があればいじめられても仕方がないと考えていた自分に気づき、どんな理由があったとしても、いじめはされる側の問題ではなく、いじめをする側の問題であるということについて理解する。

③ 手立て

【手立て1】自分の立ち位置を明確にする選択型の発問

「(Aさんは何度言っても直らないから)こんなことをされても仕方がないと思うよ。」と言ったBさんの発言について考えさせる。理由があれば相手を傷つけても仕方がないというBさんの発言について、「そう思う(仕方ないと思う)」と「おかしいと思う」のどちらか、立場を決めさせることで、教材文と自身をつなげて考えさせ、自分事として捉えることができるようにする。

【手立て2】考えを深めさせる問い返し

児童が話し合いをする中で、自己を見つめ直すことができるように、考えを深めさせる問い返しを行う。今までBさんや周りの友達の見方でしか捉えられていなかったところを、被差別者の視点で捉え直すように問い返す。また、被差別者の視点で捉え直す問い返しだけでなく、児童から出てくる意見を、新たな視点で見つめ直すことができるように問い返す。

(2) 実践の概要

① 手立て1：自分の立ち位置を明確にする選択型の発問

資料①・②の2行目までを読み、Aさんの人柄やAさんの周りに人が集まっている理由を問うた。そして、資料②を最後まで読み、「Bさんが言っていることについて、どう思いましたか？」と問うた。「そう思う(仕方ないと思う)」「おかしいと思う」の2択で立場を選択させ、その理由を記述させた。クラスの約88%にあたる23人が「そう思う(仕方ないと思う)」と回答した。(別紙表4)

学級の大半の児童が、「何か理由があれば、相手を傷つける行為でも、ある程度は許される」という考えをもっていることが明らかとなった。その後ネームプレートを黒板に貼り、各自の立場を明らかにした上で、それぞれの考えを発表させた。「そう思う(仕方ないと思う)」と答えた児童から意見を述べさせた。適宜、授業者が複数ある考えを整理したり、学級全体に投げかけたりした。

② 手立て2：考えを深めさせる問い返し

どちらでもない中間層をターゲットにして、「Aさんは仕方がないと言われて、どんな気持ちだったでしょうか？」(☆1)と、被差別者の思いを考えさせる問い返しを行った。それにより、多くの児童がAさんに共感的な反応を見せた。

また、さらに自己を深く見つめさせるために、「Aさんをいじめたのは誰ですか？」(☆2)と、加差別の主体を問う問い返しをした。はじめは、教材文の登場人物(Bさん等)が加差別者として挙がっていたが、ある児童の「授業の最初にBさんの言葉をいい(そう思う)と思った人たちもいじめをしている側だと思う。」という発言によって、授業序盤に「そう思う(仕方がないと思う)」を選んだ自分たちも、加差別と同じ立場であることに気付いていった。その場面の児童の反応を以下に示す。

**T(☆1)：Aさんは「仕方がない」と言われて、どんな気持ちだったでしょうか？**

C：(多くの児童が口々に)嫌な気持ち。悲しい気持ち。かわいそう。いじめ。

**T(☆2)：Aさんをいじめたのは誰ですか？**

C：(多くの児童が口々に)Bさん。他の人たち。大勢。Aさんの周りに集まった人たち。

C：相手が嫌な気持ちになれば、それは“いじめ”って先生言っていた。

C：Aさんも泣くくらい嫌ならみんなとBさんがいじめていると思う。

**T：実は、他にもいるのですが、気付きましたか？**

C：物語の中？ えっ？もしかして、「そう思う」を選んだ人たち？Bさんをいいと思った人たち。この言葉をいいと思っている人。

C：「そう思う」を選んだ人は、Bさんの言葉に賛成しているってこと。ちょっと言いづらいけど。

Bさんの言葉を受け止めてしまった。言いづらいけど、選んだのは、いじめているってこと…

T：この授業では気付くことが大事です。気付けたのはとってもえらいです。自分の心をしっかりと見つめることが大切です。

この後、理由があればいじめられても仕方がないという考えは誤りであることを確実に押さえるために、「迷惑をかけている人たちは、いじめられても仕方がないのですか？」(☆3)と問うた(差別の正当性を問う発問)。そして、どのようにAさんに接すると良かったのか、またBさんに対してどのように声をかけるかについて考えさせた。以下は実際の授業のやり取りである。ワークシートには、Aさん、Bさんに対して、どのような声がけをすると良いかについて記述させた。(別紙表5・6)

**T(☆3)：迷惑をかけている人たちは、いじめられても仕方がないのですか？**

C：(多くの児童が口々に)違う！！

T：では、どうすれば良かったのかな？

C：どうしても忘れてしまうんだよね、そのクセ一緒に直そうね、と言う。

C：どうしてそんな風になっちゃうの？と理由を聞いてあげる。

### (3) 実践Ⅱの成果

#### ① 手立て1(選択型の発問)により、差別事象を自分事として捉えることができた。

授業序盤に選択型の発問をしたことで、児童は素直に自分の考えを表出でき、教材文の中に身を置き、教材文と自分とを重ねながら立場を明らかにすることができていた。また、このときの自分の立場を振り返ることで、加差別の立場(いじめる側)と同じであると認識し、途中で意見を変える児童も見られた。

【授業序盤】おかしと思う：3人、中間：5人、そう思う：18人

【変更後】おかしと思う：11人、中間：8人、そう思う：7人

#### ② 手立て2(考えを深めさせるための問い返し)により、自己を見つめ直し、考えを深めることができた。

どんな理由があってもいじめをしてはいけないという旨の振り返りおよび回答をした児童は、26人であった。授業序盤で、理由があればいじめをされても仕方がないと回答した児童の全員が、自己を見つめ直し、考えを深めることができたと言える。(別紙表7)

特に被差別者の立場や思いを考えさせる問い返しに加えて、加差別の主体を問う問い返しや差別の正当性を問う問い返しを行ったことにより、振り返りの記述で、どんな理由があってもいじめをしてはならないという考えを書いた児童が一定数見られた。このことから、授業序盤で明らかとなった自分も持っている誤った認識を正しい認識へと変容させるためには、被差別者の立場や思いを考えさせる問い返しや加差別の主体を問う問い返し、差別の正当性を問う問い返しが一定程度有効であることが示された。そして、自己を見つめ直した結果、別紙表8の児童Lの発言(「Cさんみたいな優しい人になりたい。」)に代表されるように、自分の言葉で今後のあり方を語る児童が多く見られた。Cさんという理想像へのあこがれは、まさに自分事として考えている証拠である。これらの児童は、差別をなくしていこうとする具体的な行動を記述し、これからの生き方を考えることができていた。(別紙表8)

### (4) 実践Ⅱの課題

自分の中にある無意識の差別意識に気付いた児童が、自分の中にどう落とし込み、差別をなくす行動にどうつながっていくか、そのメカニズムを明確にすることができなかつた。そもそも自分の差別意識に気付いていない児童もあり、自己を見つめる段階における児童の意識の差に応じた手立ての最適化も今後の課題となった。

## 6 実践を終えて

3年生と6年生で、ともに自己の差別意識が課題となるような題材を選択し、実践を試みた。2つの実践から、人権教育、同和教育の授業において、自分の立ち位置を明確にさせる選択型の発問により、教材文と自分とを重ね、差別事象を自分事として捉えさせることができた。また、児童の思考に合わせて、考えを深めさせる問い返しを場面に応じて行うことで、児童は自分の差別意識に気づき、生き方を考えることができた。よって、この2つの手立ては、ある程度効果的であったと結論付けることができる。今後は、これらの手立てを様々な教材に適用させ、豊かな人権感覚を育てていきたい。